

製鉄記念室蘭



心電図データのほか、動画や静止画も伝送できる

従来、救急車で計測できる心電図の波形は3種類あったが、データとして伝送はできなかった。新システムでは12種類の波形を計測し、詳細なデータを病院側でも確認で

同病院と、室蘭市、登別市両消防署の救急車各1台にシステムを導入した。救命士が搬送前に患者の心電図を計測し、クラウドシステムへデータを伝送。医師はパソコンやタブレット、スマートフォン等の端末からシステムにアクセスすることで、心電図データを確認できる。

室蘭市の製鉄記念室蘭病院(松木高雪理事長、前田征洋院長・347床)は、搬送患者の心電図の詳細なデータを救急車から病院に伝送する「12誘導心電図伝送システム」を7月から本格運用する。道内初の導入で、急性期の心疾患、脳疾患等の生存率向上に役立てていく考えだ。

同病院と、室蘭市、登別市両消防署の救急車各1台にシステムを導入した。

搬送中に容体を確認し、緊急治療の準備や実施までの時間を短縮することで、患者の心筋にかかる負担が減り、治療後のQOL向上にもつながる。実証実験を4月から開始し、3例の急性冠症候群に活用した。

各消防と連携し、導入準備を進めてきた高橋弘循環器内科医長は、「病院単体で動くのではなく、地域全体への働きかけが必要。治療までの短縮時間など実際の効果を検証し、導入のメリットを地域住民へ発信していきたい」と話している。

心・脳疾患の生存率向上へ

12誘導心電図伝送システム 7月本格運用